

# 「学芸員」の撮る写真

写真は撮りますか？ 最近ではスマートフォンカメラ機能も向上し、専用のカメラがなくてもキレイな写真が撮影できるようになりました。写真集やSNSなどで注目されるいわゆる「アート写真」は構図や色合い、撮影時のテクニック、場合によってはその後の編集技術まで含め、美しい作品です。

一方で、学芸員が撮る写真の多くは「記録写真」、文字通り客観的に事実を記録し、資料的価値をもつ写真です。特に、モノ（資料）を対象とする「資料写真」を撮影する機会が多いです。照明などの道具の話はまたの機会として、今回はどのような写真を撮るのか、ポイントと共にご紹介します。

撮影時の基本ルールとしては①背景をばかしたりせず、事実通りを記録すること ②資料（被写体）全体を収めることです。背景のばかしは主

役が引き立つためよく使われる手法ですが、記録写真では「客観的事実を記録」する必要があるため、原則使用できません。

図1・2は室内の撮影スペースで撮ったものです。背景紙・布に資料を配置し、照明なども整えて撮影されています。図1は虎の像、図2は漆器（複数同時撮影）です。全体とひとつ虎は右側の面が、漆器は側面や裏面が写っていません。そのためいろいろな角度、遠近を調節して何パターンも撮影する必要があります。その中で漆器のように裏面に特徴的な部分を見つけると、部分的に撮影していきます（図3）。また、資料と二緒に定規のようなスケールを置いて資料の大きさが分かるように撮影するのも一般的です（今回、スケール部分はトリミングされています）。

ではこうした環境が整っていない野外での記録はどうするのかというと、

重要な点2つは変わらず、身近なものをスケール代わりにして撮影するなどの工夫が必要です（図4）。多くのペンは長さが14cmです。それを知っていれば、スケールが手元になくても大きさが分かるのです。そして、野外での写真は背景も大変重要な情報になります。いつどこでどのような状況で：そうした情報が写真1枚から得られるからです。そのため、ばかしたりせず、そのままを撮影することが求められるのです。

一見すると、アート写真に比べて興味を引きにくい、つまらないようにも見えがちな記録写真ですが、とてもたくさんの情報が込められています。ぜひ博物館などを訪れた際や、図録を見る際にはどんな写真があるのか、どんな情報が込められているのか、注目しながら見てみてください。

（坂本恵衣）

※今回はあくまで一例としての話なので、館や状況によって条件は異なります



図2



図1

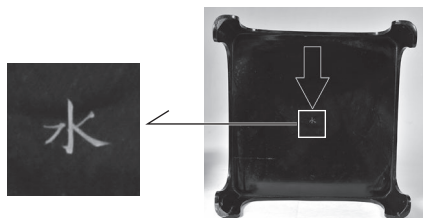
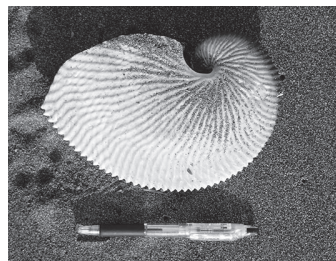


図3

図4



学芸員  
坂本 恵衣  
Kei Sakamoto

専門は文化人類学。地域信仰について調べるとともに、石狩の人々の生活の中で宗教がどのように考えられていたのか、歴史的変遷などを研究する。